しょうけい館　夏の企画展のご案内

昭和の夫婦

～“戦傷病者の妻”が生きた時代～

いまから約65年前の戦争で傷つき病にたおれた多くの戦傷病者にとって、戦中・戦後の生活をするうえで、家族の支え、とくに妻の支えをぬきには語れません。戦中には「白衣の勇士」として周囲から勧められて結婚した経緯もあれば、戦後は「傷痍軍人」と知りながらご苦労をともに生活された方など様々です。

本展では、戦傷病者ご夫婦の結婚式・戦中・戦後の写真をおりまぜて、いちばん苦しかったころの想い出を伝える資料と証言映像を展示いたします。昭和36年1月、戦争で左腕を失った漫画家・水木しげるさんと結婚して人生をともに歩んだ、『ゲゲゲの女房』（実業之日本社、平成20年）の著者である武良布枝さんも戦傷病者の妻の一人です。初公開となる布枝さんの「証言映像」、水木さんの「義手」（鳥取県境港市「水木しげる記念館」所蔵）を特別展示いたします。併せて、今回連携展示を行う千代田図書館では水木さん関連図書も展示します。

戦傷病者ご夫婦が互いを支えあって、誰もが生きることに精一杯だった「昭和」を生きぬいた人生の歩みを、皆さんもたどってみませんか。この展示会で、厳しい時代を生きぬくヒントが見つかるかもしれません。

記

【会　期】	平成22(2010)年7月1日(木)～9月26日(日)　10:00～17:30(入館は17:00まで) ※休館日　毎週月曜日(祝日開館)、7月20日(火)、9月21日(火)
【内覧会】	平成22(2010)年6月30日(水)15:00～17:00
【会　場】	しょうけい館　1階
【入場料】	無料
【主　催】	しょうけい館(戦傷病者史料館)
【協　力】	水木プロダクション　実業之日本社　水木しげる記念館　国立障害者リハビリテーションセンター
【後　援】	千代田区・千代田区教育委員会

しょうけい館とは

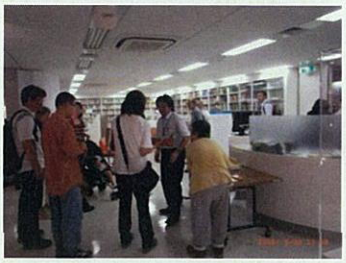
しょうけい館は、戦傷病者とそのご家族等が戦中・戦後に体験したさまざまな労苦について証言・歴史的資料・書籍・情報を収集、保存、展示し、後世代の人々にその労苦を知る機会を提供する国立の施設です。平成18年3月21日に開館しました。

【所在地】	〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-13　共同ビル九段2号館
【問い合わせ】	Tel03(3234)7821　Fax03(3234)7826　学芸課　大内・木龍
【交　通】	地下鉄「九段下」駅6番出口から徒歩1分、駐車場はありません
【ホーム・ページ】	http://www.shokeikan.go.jp

イベント

①隔週土曜 14:00～14:30（7/17、7/31、8/14、8/28、9/25）

担当学芸員によるミニ紙芝居・フロアレクチャー



2008 年度 フロアレクチャー風景

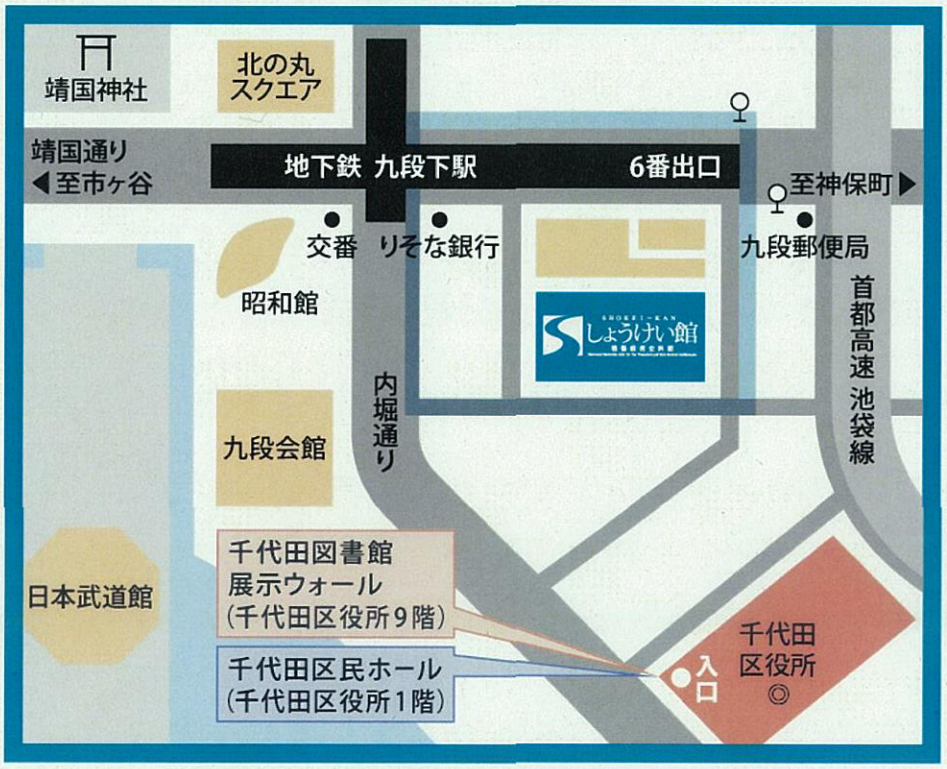
②平成 22（2010）年9月 11 日（土）

（1）14:00～15:30 千代田区民ホール （千代田区役所 1 階）

いつもそばにいてくれた～ゲゲゲの女房・武良布枝さんの証言映像上映と関連トークイベント～

（2）16:00～16:30 館内移動後にフロアレクチャー

③平成 22（2010）年7月 26 日（月）～9月 25 日（土）千代田図書館 展示ウォール（千代田区役所 9 階）しょうけい館＆千代田図書館連携展示「戦傷病者・水木しげるさんの人生」



【問い合わせ先】
しょうけい館 学芸課 03－3234－7821
担当：大内・木龍

展示構成例

本展では、約 100 点の資料を、5つのコーナーに分け、9組の戦傷病者ご夫婦について紹介します。

※資料提供者名は敬称を省略しております

1、義足と妻に支えられて：体験展示

まだ若く将来を夢みていた 20 歳代で、戦地で足を負傷して義足の生活を余義なくされた戦傷病者のみなさん。「戦後いちばん嬉しかったことは何ですか？」と伺うと、「妻の支えと自動車の免許取得がうれしかった」というお返事が印象的です。また、義足をつけて自転車通勤する方もいらっしゃいました。移動が困難になることは、生活範囲も狭めることにもなります。それらの労苦を乗り越えた皆さんのお話に耳を傾けながら、実際に使用した「義足」に触れてみて、それぞれの違いを実感してください。

義足（作業用）

昭和 30 年代

香川県　野角　敏幸

農作業で使用。軽くて、田畑の土に義足が埋まっても抜き取りやすい。

写真「夫婦で、ともに生きて」（福島県遠藤さんご夫妻）

平成 20 年

しょうけい館　撮影

戦後、足が不自由な夫とともに、妻も精一杯に働いた。

2、夫の眼となって

突然、あなたや家族の眼が見えなくなったら、明日からの生活はどうなるか、想像できますか。戦地で負傷したため眼が不自由となり、『まさか結婚できるとは思わなかった・・・』と語る戦傷病者の夫。また、「失明の主人との生活、思い出しても涙がでます。はじめは、主人は光のないもどかしさに打ちひしがれる毎日、明日への希望もなく戦争ほど皆が不幸になるものはありません。それこそ二度と絶対に起こしてはいけない惨禍です。そんな思いをかかえて懸命に生きぬいた人です。」と、妻は振り返っています。戦傷病者の妻は、夫を励まし、夫の眼になって日々の生活を支え続けました。

写真「結婚式」

昭和 17 年

埼玉県　菅　義美

当時、傷痍軍人は「白衣の勇士」と呼ばれて、澄子さんは家族から結婚を強く勧められた。お見合いで初めて出会い、2度目が結婚式。義美さんは“まさか結婚できるとは思わなかった”と振り返る。

失明者用懐中時計

昭和 18 年頃

香川県　横田　タツエ

失明者が文字盤に触れると時間がわかるように、凸凹がある。また恩賜の刻印がある。

3、妻の手作りで

今ほど物資が豊富ではなかった昭和。衣服は、妻・母親・姉など家族の手作りが普通だったのです。戦中に子どものために作ったもの、戦後に夫の身体に合せて作ったものなど、お金では買えない、唯一無二の資料といえます。これらの資料から、戦傷病者とその家族の、かけがえのない想い出と当時の生活について共感してください。

手作りの下着と型

戦後から現在まで
茨城県　野上行三

当初は結婚に反対だった母親が、義足でもはきやすい下着を作ってくれた。そこから型をとり、今はみつさんが下着を作り続けている。

写真「療養中」

昭和 34 年 3 月 1 日
広島県　﨑野保己

肺結核は癒えず、再発の為、入退院を繰り返した。その後、左肺の摘出手術を受けた。

4、脊髄損傷の夫とともに

鈴木栄さんは、大正2(1913)年7月、富士郡須津村(現在は富士市)に生まれました。昭和9年1月 20 日、現役兵として静岡第 34 聯隊第 2 中隊に入隊、青春時代の大半が軍隊生活となりました。昭和 13 年5月 17 日に、中国徐州にて第十二胸椎盲管銃創を負い、脊髄損傷となり、歩くことができなくなりました。結婚して以来、長年にわたって、夫の介護をしたのが、妻・不二子さんです。栄さんは、昭和 62 (1987)年 12 月 25 日、ご逝去されました(享年 74 歳)。家族のアルバムにあった写真と妻の証言から、戦傷病者ご家族が歩んだ足跡をたどってください。

写真「箱根療養所にて」

昭和 17 年ごろ
静岡県　鈴木不二子
鈴木栄さんは右側。

「短歌」

戦後
静岡県　鈴木不二子

妻・不二子さんが詠んだもの。車の助手席に乗っているのが栄さん。ドライブと入浴が気分転換だった。

5、特設コーナー:ゲゲゲの女房・武良布枝さんの人生

漫画家・妖怪研究者として著名な水木しげる(本名・武良茂)さんは、昭和19年に南方ラバウルで左腕を失った傷痍軍人としても、広く知られています。
島根県の商家で生まれ育った布枝さんは29歳の時、東京都で貸本の漫画雑誌に執筆していた水木さんとの縁談を持ちかけられました。お見合いしたあとにすぐに結婚、東京都調布市での新婚生活は貧乏で、苦しく苛酷なものでした。
本コーナーでは、漫画への情熱で厳しい試練を乗り越えた夫とともに、それを支えに生きてきた武良布枝さんの人生を紹介します。

・・・神主さんにお払いをしてもらい、三々九度をすませると、みんなで記念写真をとりました。
水木と私が寄り添うように座らされたのですが、そのとき、水木の左にはめた義手に私の体があたり、「コツッ」と小さな音がしました。その音を聞いたとき、ああ、私はこれからこの音を何度も何度も聞くのだろうと思いました。
実は、水木は義手をはめるのが大嫌いで、「結婚式だから絶対にはずすな」と母親からいいわたされていたために嫌々はめていたのだということを、私はまったく知りませんでした。結婚式の後、水木はもう二度と、義手をはめませんでした。コツッという音を聞いたのは、それが最初で最後となりました。・・・
武良布枝『ゲゲゲの女房』(実業之日本社、平成20年)・42頁

©水木プロ

水木しげる記念館所蔵

水木しげるさん「義手」を、7/1～8/1に特別展示します。

■証言映像シアター上映一覧:

【千葉・東京・茨城】「傷痍軍人の妻として…」
【神奈川】「二人三脚で六十年余り」
【埼玉】「二人で一人、傷痍軍人の妻として」
【大阪】「傷痍軍人の妻として」
【広島】「シベリア抑留、そして結核…それを支えた妻」
【長野】「戦病者として生きる」
【京都】「ともに歩みし いばらの道一戦傷病者の妻として一」
【福島】「義足と妻に支えられて」

【初公開】
武良布枝さん「水木さんとともに歩んだ"ゲゲゲの女房"～いつもそばにいてくれた～」

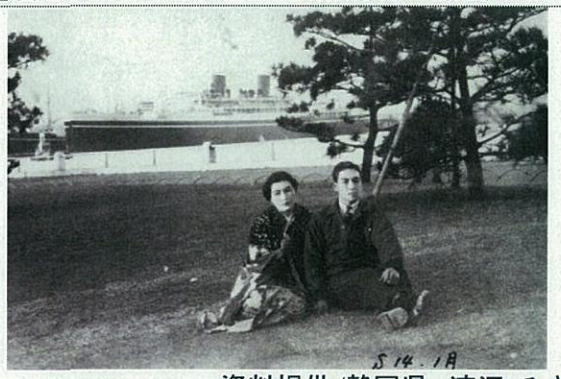
≪しょうけい館＆千代田図書館連携展示≫

1、戦傷病者・水木しげるさんの人生

水木しげる『娘に語るお父さんの戦記』（河出書房新社、1995）	水木悦子『お父ちゃんと私　父・水木しげるとのゲゲゲな日常』（やのまん、2008）
©水木プロ	父が戦後初めてニューギニアを訪れたのは、昭和四十六年だった。当時、大阪のとある遊園地で、「鬼太郎」の催しをやりたいという話があった。そこに戦時中父とニューギニアで一緒だった方がいて、その方との再会がきっかけでニューギニアの再訪が叶ったのだ。父は戦友とともに、二週間ほどの予定で旅立ち、大喜びで帰ってきた。そして再訪の感動が忘れられず、数年後には家族で移住しようと言い出し（かなり本気の気配だった）、私たちを大いに困惑させた。私は「仮面ライダーが見られないからイヤダ！」と必死に抵抗した。・・・「父と戦地・ニューギニア」より
・・・内地に帰ると、お父さんは、おじいちゃんやおばあちゃんのショックを和らげるため手のない絵をかいてはがきで知らせた。すると、おじいちゃんが、米子の駅にまっていて、手をみると、「ええっ、えらい短いなあ」と、さわってみて、「あっ」とおどろき、「せめてこのぐらいあったらなあ」といっていた。おばあちゃんは、片手になったらどれだけ不自由になるかというので、一週間前から片手で生活していた。おじいちゃん、すなわち、お父ちゃんの兄弟たちは、「あれは昔から横着で、なんでも片手でやっていたから、一本になっても同じことだろう」といっていた・・・	撮影　野口さとこ

2、戦傷病者の体験記：渡辺謹一『両足を失った記録』と写真パネル展示

渡辺謹一さんは、昭和 18 年 1 月 4 日、中国にて受傷し両足切断という重傷を負いました。写真と当時の想いを書き留めた記録から、戦傷病者が療養中どのような気持ちだったか、読み取ってください。

 資料提供/静岡県　渡辺　みさほ	
昭和 14 年 1 月、渡辺謹一さんは幼なじみのみさほさんと再会。結婚を約束した 1 カ月後、出征しました。	「いざ、立ち上がらん」 昭和十九年夏。東京第三陸軍病院にて。 “重傷者は人に甘えては不可ない” “不自由を常と思えば不足なし” 当時、恋の東一、鬼の東三、と言はれた程、この病院は日常生活も厳しかった。わざと転んで自分の力で起ち上がる訓練も幾度となく繰り返された。時計修理技術の基礎も習得した。